

## 擬態語あれこれ

大津 隆文

犬がワンワン、紙がヒラヒラなど日本語には擬声語、擬態語という言葉が豊富だ。擬声語は実際の音を表わし、擬態語は人や物の様子を音声にたとえて表わす。両者を合わせてオノマトペと呼ばれ、これが日本語に多い理由は、日本人の感性の豊かさ、日本語の動詞の少なさ等の理由が挙げられている。たしかに日本語では、笑うという動詞に対応して、ニコニコ、ニヤニヤ、ニタニタ等の擬態語が豊かな一方、英語では、smile, laugh, grin, giggle等動詞の種類が多い。

問題は擬態語は実際に音は出ていないので、擬声語に比べると客観性が低いことだ。笑い方をニコニコとするか、ニヤニヤとするかによって印象は大きく変わってくる。かつて、リベラルとされる某紙の記者と、同紙で政権側の人物が笑っているのをニヤニヤとしているのは、中立性に反するのではないかと論争したことが思い出される。

私が気に入っている四つの擬態語は、カミカミ、テクテク、ニコニコ、ワクワクだ。シニアが健康な生活を送るための心掛けとして教えられた。前の二つは自信があるが、後の二つは自信がない。

退職後の日常で私の最大の楽しみは食べることだ。この貴重な時間を少しでも長くしたいと、食べ物は何時間もかけて味わっている。問題はカミカミしている間は口がきけないので黙っていると、家内は話題を変えてしまい会話がカミ合わないことだ。もう一つは家内の方が早く食事を終わり、退屈そうにしていたり、後片付けをしようとウズウズしていることだ。

ニコニコやワクワクについては、長年「男は黙って」を良しとし、感情を抑制する癖がついてしまったせいかな不得手である。しかし、ニコニコしたりワクワクするのは楽しいことなので、遅まきながら心掛けていきたい。

最後に俳句。十七文字に限られた世界なので、適切なオノマトペは極めて効果的であり、眼前に景色が浮き上がってくる。次の句はそのお手本である。

鳥渡るこきこきこきと罐切れば

秋元不死男

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

川端 茅舎